

2021 年度実施概要

学校名

大阪府泉南郡岬町立深日小学校

採択活動名

海洋文化の交流による港町のふるさと再発見 - 小大連携による「ひと・まち・つながり・ひろがる教育」 -

実施単元 ※実施した単元の数に応じて記載してください

単元名	学年	教科
1. 長松海岸に行こう	3・4年	総合・社会・理科
2. 漁師さんの言い伝えを調べよう	3年	総合
3. オンライン中継授業（時に海を見よう）	3年	総合・理科・社会
4. 深日漁協の組合長さんにインタビュー	5年	総合・社会

取り組みの概要

本研究は過疎化と少子高齢化に直面する深日小学校を事例に、漁師町の深日に伝わる独自の文化である「逆ことば（さかことば）」や漁師の言い伝えや縁起担ぎなどの海洋文化の継承と発信による地域の魅力の再発見を目的としている。また、ICT教育の推進として、石川県にある小学校教員養成課程の金沢星稜大学人間科学部子ども学科の学生とリモート交流することで小大連携による人的・物的資源の教育効果の向上も目指すものである。本研究の特色は、いわゆる地域の特徴についていかに捉えるかという観点が重要になっている点である。これまでの海洋教育の実践において一般的な児童と海とのかかわりや水生生物などの観察といったテーマに加え、漁師や海に関わる人々の方言、言い伝え、因習などの文化的なアプローチ、コロナ禍における漁師の取り組みなどの社会問題に対するアプローチも合わせることで、総合的に海洋教育を考察することである。そのための外部連携として、①フィールドの提供と水生生物の捕獲・解説等として、深日漁業協同組合及び大阪府水産技術センター、②地域学習のあり方や地域の特徴の分析と助言として、岬町教育委員会生涯学習課、野間晴雄教授・松井幸一准教授（関西大学文学部地理学地域環境学教室）、舟橋和夫名誉教授（龍谷大学社会学部）、③児童理解及び教職志望の学生との小大連携として、芥川元喜准教授（金沢星稜大学人間科学部子ども学科）らとの交流と大学での深日小教員による講演を実施した。このように深日をフィールドとしつつ、深日漁業協同組合、大阪府水産技術センター、岬町生涯学習課といった官民の連携に加え、領域の異なる専門家による学際的なメンバーによって各単元が構成されている。それらの成果と課題から多面的に社会や文化を捉え、過疎・人口減少・少子高齢化に翻弄される各地の漁村でにおける小学校での海洋教育の一例として提示したい。

1. 長松海岸に行こう

長松海岸は深日小校区にある大阪府唯一の自然海岸である。学校から非常に近くにありながらも児童が親しむことは非常に少ない。3・4年生へのアンケート調査の結果、11人中4人しか訪れたことがなく、長松海岸がどこかさえもわかっていない児童が多くした。そこで、深日漁業協同組合と大阪府水産技術セ

ンターの協力のもと、磯遊びを企画した。当初、磯遊びの計画は無かったが、大阪府下における緊急事態宣言の延長により、①当初予定していた計画の実施目処が立たないこと、②海に近く、大阪府下でも有数の釣りスポットでもあり、漁業関係者の保護者が比較的多いという環境にもかかわらず児童にとって海洋に対する自然体験は非常に希薄であることがわかった。そこで、大阪府水産技術センターの睦谷一馬氏から指導・助言をいただき、児童の磯遊びを計画した。計画では、深日港での海の様子を観察、人口干潟における水生生物の観察と生態の違い、干潮時の長松海岸での自然観察の3つを体験することとした。睦谷氏らの協力により、海での危険な生き物などの注意事項が明確になり、専門的な知識を持った方が随時、児童に説明してくれることで安全面と学習面の両立ができたことが非常に大きい。児童が海に興味関心を持つきっかけとして効果的な導入ができた。また、学習した内容を模造紙にまとめるにあたって睦谷氏に来校いただき、児童等の学習の様子を見てアドバイスなどをいただくことができた。各校が社会見学として水産技術センターを来訪することはあっても、自身が来校して海洋教育に関する学びの様子を見る機会はなかったとのことで、児童の学びの様子や学習の深まりに非常に感心しておられ、円滑な協力関係を築く契機となった。



2. 漁師さんの言い伝えを調べよう

深日には「逆ことば（さかことば）」と呼ばれる特有の方言がある。そのため、関西のバラエティー番組や新聞記事などでも取り上げられる機会がある。この言葉は深日地区内でも漁師町を中心とした漁業関係者が多く使うものであるが、時代の移り変わりに伴って現在ではごく限られた高齢者のみが使っている程度である。こうした特有の言語文化の中に、漁師の言い伝え・縁起担ぎ・因習がある。例えば、『岬町の歴史』（1995年）によれば、「出漁時に弁当には酢の物や天ぷらを入れない（スモドリ、漁がアガルに通じる）」、「弁当の梅干しの種は海に捨てない（種は海中に沈んで、その後芽が出ない）」など複数ある。こうした漁師社会における海洋文化も高齢化や後継者不足によって、十分に伝承されることなく姿を消している。実際に、深日漁業共同組合の組合員（20名）へのアンケート調査でもこうした言い伝えを「知らない」と回答したのは19名おり、こうした言語文化そのものが既に崩壊している状況にある。そこで、町史などに記録されているものだけでも「継承」していこうというコンセプトのもとに、言い伝え・縁起担ぎ・因習をクイズ形式で学習することとした。自由な発想を楽しめる観点からも3年生の児童を対象とした。授業では、クイズ番組風の流れて「漁に行くときにお弁当には酢の物や天ぷらを入れないのはなぜでしょうか？」と発問し、各自がホワイトボードに回答を記入した。回答には、「酔うからやと思う」、「天ぷらは冷めたらまずい」などの子どもらしい回答があった。これらの回答を全員が発表し、ときに笑い・共感しながら授業を進めた。各自が記入した回答はカメラで撮影し、後日、それら児童の回答を盛り込んで学習

のまとめとしてグループごとに分かれて模造紙にまとめた。児童各自の考え（児童の学びや気づきや発想）を作品に入れたことで、単に言語文化の継承・発信という無味乾燥なもので無くなり、言葉や文化が持つあたたかさが読み手に伝わるものとなった。この作品は大学での講演等でも使用したが、非常に好評で大学生らが笑ったり、感心して読み込んでいた。また学生だけでなく研究者らにとっても非常に新鮮であったらしく、講演では取り組みに対して多くの質問や感想をいただくことができた。

3. オンライン中継授業

深日漁港で水揚げされた大阪湾の魚貝類をタッチングプールに入れて児童が直接触れて観察し、その様子や感想をリモートで金沢星稜大学の大学生に伝える授業に取り組んだ。岬町でもGIGA構想の進展により、岬町教育委員会が1人1台のタブレットPCの配布やモバイルルーターなどを貸出しできるようにするなど、環境整備が急速に整った。こうした機材を利用し、屋外からの児童が主体となった大学生へのリモート授業を計画した。これまでの磯遊びや漁師の言い伝えの学習などの経験も活かし、深日の漁師さんや大阪府水産技術センターの職員の方にもお手伝いをいただきながら魚貝類の簡単な説明をした。リモート授業にあたってはテレビの中継番組を意識した台本を作成した。内容はタッチングプールの魚の紹介だけでなく、漁師の言い伝えのクイズを大学生に出題するなどできる限り双方向のコミュニケーションができるように配慮した。児童らは大学生との交流を心待ちにしており、自分たちが感じたことを発表した時に笑顔で反応してくれたことを非常に喜んでいて。また、金沢星稜大学の学生ら（4回生）は初等教育専攻ということもあり、これまでも学校現場へのボランティアや教育実習等を経験してきている。次世代の教員に求められるICT教育の成果や課題、少子高齢社会や過疎地の学校についても考えてもらうという観点から児童との交流後、岬町教育委員会生涯学習課、深日漁協の漁師、岬町ICT支援員、大阪府水産技術センターの方々とのリモートでの交流の機会を設けた。これにより大学生らにとっても児童や教員など学校関係者以外の視点から海洋教育をテーマとしたリモート授業について意見交換したことで小大連携の価値が高めることができた。学校現場におけるICT機器活用の応用という観点からもモバイルルーターの利用によって、地域の魅力を伝えやすくなり、臨場感や空間の広がりを感じられるという観点からも実験的な授業であったが大きな成果を得ることができた。





4. 深日漁協の組合長さんへのインタビュー

深日漁協の南泰治組合長へのインタビューを行った。感染状況が拡大する中での実施だったため、安全面の配慮から事前に児童による質問事項等をまとめ、教員が代表してインタビューし、その様子を録画したものを児童が視聴することとした。内容は、①深日の漁師らの世界観や価値観を示す小噺、②コロナ禍での水産業の現状、③後継者育成に向けた取り組みである。①の小噺は非常に短い笑い話であるが、親や先輩漁師から語り継がれたもので、昔の漁師の様子を知るうえで興味深いものであった。②はコロナ禍で会食が控えられ、飲食店が休業に追い込まれることで魚を獲る漁師も死活問題となっている。組合長は現在の漁師たちの憤りや困り感を切実に、かつ児童にもわかりやすく答えてくれている。③は深日漁協独自の後継者の育成への取り組みである。新しく漁師を始めようとする若者らにノウハウを教えるだけでなく、生活が成り立ち定住してもらえるようになるまでの社会経済的援助を漁協が中心となって行うものである。こうした内容を児童が模造紙等にまとめ、岬町内にある道の駅に掲示した。この道の駅では町内で獲れた魚介類が安価で並ぶことから多くの観光客らが訪れる施設である。こうした場所に掲示することで、海を生活の糧とする「漁師」にスポットを当て、現在の漁師を取り巻く社会問題について来訪者に見てもらい、考えてもらう機会とした。また、これら一連の取り組みを関西大学、龍谷大学、金沢星稜大学に、担当教員と管理職が訪問し講演をおこなった。

活動中の写真

デジタルデータにて2~3枚の添付をお願いします。

(本ファイルへの貼り付け、別ファイルでの添付、どちらでも構いません)